

我が家のフェンス

【思えば失敗ばかりの教員生活。ろくな指導もできなかった私を、教え子たちはどう思っているのだろうか。】

昨年春、私が初めて教えたクラスの生徒から急に電話がかかってきた。彼は今、土木に関わる仕事をしているが、最近公共事業が減って仕事が少ないという。私の家のフェンスを作りたいがなんとかならないか、という話であった。以前同級生の結婚式で会った時、フェンスがあるといいなあ、などと話したことがあったのでそれを思い出したのだろう。

教員になって初めて担任をしたクラスである。今にして思うと、私はとんでもない教師であった(今も大して変わってはいないが……)。きっと生徒の親は心配で仕方なかっただろう。私はふらふらしながら、失敗を繰り返し、なんとか彼らを卒業させることができた。初めて教師になった生意気な若者が担任である。きっと父母の方々は文句の一つも言いたかったに違いない。しかし、そのクラスの親は頼りない私を支えてくださった。今にして思うと、感謝に堪えない。20年も前の話である。

私にフェンスを作れというK君は、小学校から課題のある生徒ということで入学してきた。確かにいろいろなことが気になった。若い私は事あるごとに彼と衝突をした。彼の両親は、私の至らない点に不平を言うようなことは決してなかった。K君を支え、そして私を支えてくださった。子供を愛し、子供を大切にすること、その子の困難を取り除いてやることではない。困難を乗り越える力をつけてやることなのである。子供が育つ時とは、困難やつらさをその子が乗り越えるときである。そのことをK君の親はわかっていたように思う。

今でも忘れられない出来事がある。学校である問題が起こり、それをどうもK君がやったようだ。私はそのことをK君に確かめるために家庭訪問をした。彼の部屋で二人で話した。私はK君がやったのではないかと問いつめた。するとK君がこう言った。

「先生は、俺のことを信用すると言いながら全然信用していない！」

私は言葉を飲み込んだ。生徒を信用するとはどういうことなのか、そのことさえも自分はわかっていないのだ。信用することの意味もわからずに、平気で信用すると言っていた自分の軽薄さ。全く情けない。「すまん」としかその時の私は言えなかった。信用することと事実を目を背けることは違う。信用しているからこそ、事実を知りたいのだ。そんなことさえもわからずに、「信用していない」の一言にひるんだふがない私であった。

その後、K君は立ち直り、悪い事をせず、立派な中学校生活を送ることになる。当然、私が何をしたわけではない。彼を立ち直らせたのは、彼自身がサッカー部の活動に本気で取り組んだことと、その結果

得た友人たちである。今では自分で事業を興し、私の家にフェンスを作ろうというのだ。

「お前に任せるから好きなように作れ。」と、ら私の家を尋ねてきた彼に言った。「先生、予算は？」と聞く彼に、「好きなように作れ。」と、かっこよく言う私。2ヶ月後、立派なフェンスが出来上がり、彼が請求書を持ってきた。予定をずいぶん上回る金額になってしまったようで彼は恐縮したが、好きにしろ、と一度言ったことだ。K君は、昔と同じ笑顔で帰っていった。随分と奮発したフェンスを毎日見るにつけ、K君やK君の両親に感謝する私なのである。